

## 東京言語研究所 2021 年度春期講座

		課目 (講師)	
【1日目】 4月17日 (土)	1限	音韻論 (窪菌晴夫) オンライン	
		日本語文法理論Ⅱ (川村大) オンライン	
	2限	形態論と意味 (松本曜) オンライン	
		社会言語学 (嶋田珠巳) オンライン	
	3限	フィールド言語学入門 (長屋尚典) オンライン	
		音声学 (中川裕) オンライン	
	4限	認知言語学Ⅰ (西村義樹) オンライン	
		生成文法入門 (高橋将一) オンライン	
【2日目】 4月18日 (日)	1限	認知言語学Ⅱ (池上嘉彦) オンライン	
		実験音声学 (北原真冬) オンライン	
	2限	言語心理学 (大津由紀雄) 対面+オンライン	
		認知語用論 (松井智子) オンライン	
	3限	生成文法Ⅱ (斎藤衛) オンライン	
		日本語文法理論Ⅰ (尾上圭介) 対面+オンライン	
	4限	史的言語学 (吉田和彦) オンライン	
		意味論への招待 (酒井智宏) オンライン	

1限 (10:00~11:20)    2限 (11:40~13:00)    3限 (14:00~15:20)    4限 (15:40~17:00)

17日 (土)	1 限	音韻論：一般言語学から見た日本語のプロソディー 窪 蘭 晴 夫 (国立国語研究所教授)
		<p>今年度の理論言語学講座（後期）では一般言語学や言語類型論の観点から日本語のプロソディー（アクセント、イントネーション）を考察します。一般言語学の視点から見ると日本語の現象がどのように分析できるか、また日本語の分析、とりわけ方言の分析が一般言語学にどのように貢献できるかを考察する講義です。そのイントロとして、この春期講座ではアクセントと音節・モーラをめぐる問題を検討します。</p> <p>諸言語の音韻分析においてモーラと音節が重要な役割を果たしていることはよく知られています。アクセント規則においても、モーラで距離を測る言語もあれば音節で測る言語もあります。面白いことに、日本語という言語の中にその両タイプの体系が存在し、中でも九州西南部の姉妹方言の中に、モーラでアクセント位置を決める方言（長崎）と音節で決める方言（鹿児島）が存在しています。モーラ方言が多い日本語諸方言の中でどうして鹿児島方言（だけ）が音節でアクセントを決めるのか、これが長年の謎でした。この講義では、もう一つの姉妹方言である甌島方言の調査資料をもとに、一般言語学的な視点からこの謎を解き明かしたいと思います。</p>
		日本語文法理論Ⅱ：「ヴォイス」って何だろう 川 村 大 (東京外国語大学教授)
	<p>文法研究や言語教育の場で頻繁にお世話になる用語 (term) のひとつに「ヴォイス voice」というものがあります。本来は西洋諸言語の動詞の、「能動態—受動態」の対立のことを指す用語でしたが、現在では「能動—受動」も含みつつ、「主語（主格）をめぐる名詞句交替を伴う、（形の似た）動詞述語の対立」あるいは「（形の似た）述語述語の交替に伴う、主語（主格）をめぐる名詞句交替現象」を指す用語として用いられているようです（研究者によってその中身はいろいろ）。さて、今日日本語研究では、多くの場合能動（動詞もとの形）・受動（動詞+ラレル）・使役（動詞+サセル）の3つの形態、あるいはその形態が作る構文の在り方の違いを「ヴォイス」と呼ぶのが最も一般的です。しかし、その定義からすれば「ヴォイス」の中に入れてしかるべきものは他にもありそうです。また、「ヴォイス」の中に「動詞+ラレル」の受動文（受身文）を作る場合があるのはわかりますが、では、自発を表したり可能を表したりする場合はどうなるのでしょうか。用語「ヴォイス」を日本語に適用するのはそう簡単な話ではなさそうです。この講義では本編の序説として、用語「ヴォイス」をめぐる諸問題を整理したいと思います。</p>	
2 限	形態論と意味：複合語を使った分析のエクセサイズ 松 本 曜 (国立国語研究所教授)	
	形態論とは、語の内部構造について研究する分野です。語には、派生語（ <i>kindness</i> など）、複合語（「男泣き」など）など、複数の要素が含まれるものがありますが、そのような語の構造について考察する分野です。ここで	

	<p>は、その形態論と意味との関係について考えます。形態論は、語を分類したり、そこにパターンを見いだしたりする分析方法を具体的に学ぶことができる分野です。そこでこの講義では、日本語の複合語を取り上げて、複合のパターンと意味がどのように対応しているのかを皆でいっしょに分析していきたいと思います。取り上げるのは、「すすり泣き」「作り泣き」「立ち読み」「凍え死に」「食べ残し」など、二つの動詞からなる名詞です。それらを種類に分け、その性質の違いを見つけ出していきたいと思います。授業の前に、該当する語を思いつく限りリストしてくると、より有意義になると思います。</p>
	<p>社会言語学</p> <p style="text-align: right;">嶋田珠巳（明海大学教授）</p>
	<p>「言語学」の前に「社会」が付いて、「社会言語学」。言語学のすしお堅いイメージも、「社会」言語学になるとどことなく人間味が加わったようで、とつきやすさを感じるでしょうか。それとも、「社会」が入った分、実際のところはもっと複雑になる、などということもあるのでしょうか。</p> <p>そもそも、ことばは人が話すもの。その話者のいるところ、属している集団、社会、コミュニティ。言語を理解するのに、人を、そしてコミュニティを意識せずには始まらない。社会言語学のおもしろさはそういったところから展開されます。</p> <p>この講義では、社会言語学とはどのような学問領域かを概説したうえで、とくに私がこんなところが楽しい！素晴らしい！と思っていることを取りあげたいと思います。今年度の理論言語学講座「社会言語学」では、後期に「話し言葉からの言語学」というテーマで講義を担当します。「敬語」と「タメ語」、「方言」と「標準語」など、普段の言語使用は、まず言語、さらにはコミュニティ、文化を知る豊かな素材です。「話者の見える言語学」としての社会言語学の魅力を春期講座でも感じていただけたらと思います。</p>
<p style="text-align: center;">3 限</p>	<p>フィールド言語学入門</p> <p style="text-align: right;">長屋尚典（東京大学准教授）</p> <p>フィールド言語学は、広く定義すると「ある言語をその言語が話されている自然な環境で研究する方法」のことです。したがって、日本語母語話者がチェロキー語、サポテク語などのあまり一般には知られていない言語を研究するような場合だけでなく、英語や日本語の方言、さらには自分の母語を研究する場合も含んだ言語研究の方法論を指します。この意味でのフィールド言語学は100年以上の歴史を持つ確立された方法論であると同時に、現在、言語学で最も活発な分野の一つです。アメリカの大学院では言語学における必須のトレーニングの一つと考えられており、今年度私が担当する講座「言語類型論」の基礎ともなっています。</p> <p>春期講座ではそのフィールド言語学の全体像の導入を行います。扱う主なテーマは、フィールドワークの定義、目的、歴史、調査方法、分析手法、成果発表、言語ドキュメンテーション、研究倫理などです。</p> <p>「母語以外の言語を研究してみたいがどうすればいいの?」「言語学者は世</p>

	<p>界の少数言語をどのように記述しているの?」「フィールドワークするためには何を勉強すればいいの?」「どんな本を読めばいいの?」春期講座では、そのような疑問に対する答えを探っていきたいと思います。</p> <p>音声学：言語音の多様性を理解するために  中川 裕（東京外国語大学教授）</p> <p>この講義では、世界の言語音の多様性を理解するための2種類の接近法について分かりやすく講義します。接近法の一つは国際音声記号(IPA)に代表され、もう一つは広域音韻類型論に代表されます。広域音韻類型論の解説の際には、古典的な Maddieson (1984)から最新の研究動向 Everett (2018)までの成果を踏まえます。さらに、広域音韻類型論を補完する新しい音韻類型論の試み「稀少特徴の地域音韻類型論」(Nakagawa, et al. 2019)についても触れます。</p> <p>この講義によって、音声学（前期）で訓練する調音音声学的技能は、個々の言語音を単に観察・記述する道具ではなく、言語学という学問領域の発展に貢献するための知識体系の一部であることがわかるはずです。</p> <p>References  Everett, C. (2018) The similar rates of occurrence of consonants across the world's languages: A quantitative analysis of phonetically transcribed word lists, <i>Language Sciences</i>, 69, 125-135.  Maddieson, I. (1984) <i>Patterns of Sounds</i>, CUP.  Nakagawa, H., T.Güldemann, F. Lionnet, and A. Witzlack-Makarevich (2019) Khoisan phonological typology database and the relative frequencies of consonants in the Khoisan languages, 13th Conference of the Association for Linguistic Typology, University of Pavia, Italy.</p>
4 限	<p>認知言語学 I : Langacker を読む  西村 義樹（東京大学教授）</p> <p>日本語や英語のような個別言語をそれぞれの言語の母語話者が適切に使用することができるのは母語話者にどのような（大部分は意識されない）知識が備わっているからなのでしょう。この知識はヒトのもつ他の知識や能力とどのように関係しているのでしょうか。文法に関する知識と意味に関する知識、語彙的な知識と文法的な知識は相互にどのような関係にあるのでしょうか。認知文法（<b>cognitive grammar</b>）はこれらの問いに答えることを目標とする理論の1つです。本講義では、認知文法がこの目標をどのようにして達成しようとしているのかを、認知文法の創始者である <b>Ronald W. Langacker</b> の著作から厳選した文章を深く正確に読み解くことを通して明らかにします。英語が得意でない人にも原典に真剣に取り組むことの意義と楽しさを十分に共有していただけるように努力します。（同じく「Langacker を読む」と題した今年度の夏期集中講義は認知文法の基礎から最前線までが見渡せる構成にする予定ですが、本講義はその予告編の役割も兼ねています。）</p>

		<p>生成文法入門</p> <p style="text-align: right;">高橋 将一 (青山学院大学教授)</p> <p>生成文法理論では、人間は、生まれながらに、ことばを獲得し、使用することを可能にする能力を有していると考えます。そのような立場をとる論拠の一つとして、私たちは、明示的な学習を伴うことなく、ことばの表層的な情報からだけでは知り得ることが難しいと思われるルールに従ってことばを使用しているという特徴があります。このような特徴は、私たちがことばに対して抽象的な構造、つまり直接的には観察できない構造を構築する能力を生得的に有しており、その構造に基づいて規定されていることばのルールに従っていることを表していると考えられます。</p> <p>本講義では、主語・動詞・目的語といった表面的な語順や文法的状況は全く同一であるように思える文であっても、詳細に検討してみると非常に異なる振る舞いを見せる文を紹介します。このような言語現象を説明するためには、抽象的な構造や表面的には観察することができないような音形を伴わない要素を仮定する必要があることを論じ、私たちのことばに対する理解を深めていきたいと思っています。</p>
18日 (日)	1 限	<p>認知言語学Ⅱ「する」と「なる」の言語学』とその周辺 — 共時的にも通時的にも</p> <p style="text-align: right;">池上嘉彦 (東京大学名誉教授)</p> <p>外国語と多かれ少なかれ苦労してつき合った経験のある人なら、誰しもその反面、いつの間にか自然と身につけてしまった自分の母語とは、(勉強して多かれ少なかれ身につけた外国語と較べて) 一体どういう言語なのかと改めて考えてみたくなるはずです。『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』と題された書物(大修館書店、1981)も、そのような問いかけから生まれたもの、エッセイ風の考察と言語学的な論考との中間あたりを念頭に置いての著作でした。変形文法一色に染まっていた時期には異端的な存在と見做されていたらしいですが、現在まで18刷を重ね、今では認知学的な先駆的試みと受けとめられているようです。昨年度半年間はこの書物の成立に関わるいくつかの動機づけについてお話ししました。本年度は、まず、その点についてのいくつかの補足をさせていただいた後、書物で提示されているさまざまな基本的な論点を言語研究の流れの中で現時点から見た形で紹介させていただき、併せてその後得られた新しい知見にも言及する予定です。春期講座では、取り上げることになる言語・文化にわたる諸問題のうち、言語に関わるものに限って、配布資料で具体例に沿って概観します。</p> <p>実験音声学</p> <p style="text-align: right;">北原 真冬 (上智大学教授)</p> <p>音声分析ソフトウェア Praat を用いて、実験のデザインと実施、そして結果の分析についての概要を示し、自ら音声学的な実験を執り行うための導入の第一歩をお伝えします。春期講座では、講師側の PC で多くのデモを示す形で講義を行い、実験実習の場面をなるべく具体的にお伝えすることを目標とします。皆さんも可能であれば PC を用意していただいて、その場で試し</p>

	<p>てみることをお勧めしますが、受講要件として必須ではありません。</p> <p>例えば簡単な音声産出課題を行うには、被験者ごとにランダムなリストを用い、余計なノイズを立てないように気をつけながら、練習セッションと本番セッションを行うという段取りが必要になります。産出課題の録音が済んだところでは実験の仕事の25%ほどが終わっただけで、ここから音声にラベル付けを行い、測定値を得るという時間のかかる仕事が待っています。これらの仕事の中の一つつまづきやすい部分について特に丁寧に解説します。</p> <p>一方音声知覚実験は、刺激を準備し、被験者の課題をコントロールするプログラムがうまく書きあがれば、仕事の75%は完了したと言えます。得られた測定値などからグラフを作るのは比較的すぐにできます。春期講座ではいわゆる同定課題(identification task)を例にとって、そのコントロールの仕方を解説します。</p> <p>実験音声学は、これまで実験という手続きにあまり馴染みのない方にとっては非常にハードルが高く感じられるものかもしれません。しかし、さまざまなフリーのソフトウェアが手に入りPCの性能向上やインターフェースの整備も進んだ現在、それほど難しいものではありません。この春期講座を通じてひとりでも多くの方に実験音声学の醍醐味に親しんでいただきたいと願っています。</p>
2 限	<p>言語心理学</p> <p style="text-align: right;">大津由紀雄（関西大学客員教授）</p> <p>みなさんを認知科学の一分野としての言語心理学（psycholinguistics）へ誘うことを目的とした講義です。言語心理学は母語獲得と言語運用の研究を中核にしていますが、両者が言語知識の研究と歩調を合わせ、三者が有機的な関連を保ちながら発展してきたところに、20世紀中盤の「認知革命」以降の言語心理学の特徴があります。この講義では、母語獲得のメカニズムを探ることによって、こころ（mind）の神秘に迫る試みの一端をできるだけわかりやすくお話しします。参考文献として、以下の論文を挙げておきます。</p> <p>Yang, C., Crain, S., Berwick, R. C., Chomsky, N., and Bolhuis, J. J. 2017. "The growth of language: Universal grammar, experience, and principles of computation". <i>Neuroscience and Biobehavioral Reviews</i>, 81(Part B):103 – 119.</p> <p>認知語用論</p> <p style="text-align: right;">松井智子（東京学芸大学教授）</p> <p>語用論は、会話を中心とした日常的なコミュニケーションのメカニズムを研究する学問分野です。会話で使われる言葉の意味を解釈するとき、また会話の中で言葉になっていないメッセージを汲み取るとき、どちらも相手の「意図」や「態度」といった、目には見えない心の状態を推し量ることが鍵になります。この講義では、コミュニケーションにおいて、相手の意図や態度を推測する能力を「語用能力」としてとらえます。そしてその働きや発達、障害について検討し、後期の理論言語学講座で取り上げる内容の導入とします。</p>

	<p>言外の意味の理解をも可能にする語用能力を支えるのは、相手の心のうちを読み取る推論能力です。これは、哲学や心理学で「心の理論」と呼ばれる能力と近いと考えられています。本講義では、この心の理論の発達途上である子どもや、心の理論に障害があるとされる自閉スペクトラム症児・者のコミュニケーションの困難さに触れながら、語用能力とは何か、考えていきたいと思います。</p>
3 限	<p>生成文法Ⅱ:生成文法の歴史-言語学における「説明」とは？ 齋藤衛（南山大学教授）</p>
	<p>生成文法は、過去 60 年余の研究を通して、目覚ましい発展を遂げました。それは、文字通り、言語知識の説明を深化させてきた歴史です。本講義では、この歴史を振り返りながら、そもそも言語学における「説明」とはどのようなものであるのかを考えます。</p> <p>テーマは抽象的に見えますが、講義では、文や名詞句の構造、Wh 疑問文や受動文に見られる移動現象などに関する具体的なデータを多く取り上げます。まず、私たちが小学校から高校までに習った英語や日本語の文法事象、例えば、英語の 5 文型、日本語の動詞活用といった事象をどのように説明できるか考えます。それを入り口として、生成文法の歴史の概略を示し、1) 規則の体系としての文法、2) 規則群を説明する原理の体系としての文法 (LGB 理論)、3) 原理群の説明をめざすミニマリスト・プログラムの動機と概要を、順次紹介します。また、この発展を、(少なくとも) 過去 3 千年に及ぶ言語研究の歴史の中に位置付け、その意義を考えながら、講義を締めくくります。</p>
	<p>日本語文法理論Ⅰ：「なぜ」を問う言語学 尾上圭介（東京大学名誉教授）</p>
	<p>母国語の文法に関する思索のおもしろさは、「なぜ」を問うところにある。その「なぜ」の 90 パーセントは、下の (A) (B) のいずれかである。</p> <p>(A) 言語の根源的大問題をめぐって、「なぜ」を問う。  (A-1) どの言語にも品詞として名詞と動詞がある。なぜか。  (A-2) 文 (述定文) に主語と述語があるのはなぜか。  (A-3) 述語がなくても文としての意味を伝えるのはなぜか。  (述定文と非述定文) (存在承認か希求)  (A-4) 述語の文法的意味として、過去・現在・完了などの時間性と、推量・意志・可能性などのモダリティ (非現実領域の事態を語る時の意味) とがある。なぜか。 (現実界存在と非現実界存在)</p> <p>(B) 日本語の個別文法形式の多義性に関して「なぜ」を問う。下はその一例。  (B-1) 動詞スル形の多義性の由来 (眼前の運動の描写・命令・主語の性質など)  (B-2) 動詞シヨウ形の多義性の由来 (〔終止法〕推量・意志・勧誘・命令、〔非終止法〕未実現・可能性など)  (B-3) ラレル形述語の多義性の由来 (可能・意図成就・自発・尊敬・受身など)</p>

	<p>(B・4) 係助詞ハの多義性の由来 (題目提示・対比・当該事態への集中など)</p> <p>○(A)は文成立論 (21 年度理論言語学講座本編「日本語文法理論 I」のテーマ) の中心的概念。</p> <p>○ (A) (B) 両方の根底にある見解として、文の意味とは、大きく言ってしまえば、〈存在承認〉か〈希求〉。</p> <p>○(B)の「なぜ」は、その文法形式固有の語性と結果的に表す意味 (用法) を峻別して語性から論理的に用法を導き出すという方法によってこそ説明できる。〈語性用法派〉の観点。</p>
4 限	<p>史的言語学</p> <p style="text-align: right;">吉田 和彦 (京都産業大学客員教授)</p>
	<p>一般にはあまり知られていませんが、言語学の科学としての存立をはじめて確かなものにした分野は史的言語学 (歴史言語学) でした。20 世紀に構造主義言語学、さらに生成文法が到来する以前に、ライプツィヒにおいて歴史比較言語学の研究を進めていた「青年文法学派」というグループのひとりであったアウグスト・レスキーンは 1876 年につぎのように述べています——言語学があらゆる科学のなかでひとつの地位を得るためには、動機づけのない恣意的な音法則を排除しなければならない——。彼らの研究を推進する原動力になったのは、諸言語の膨大な資料に対して適用される、規則性の原理に支えられた厳密な方法論の確立でした。この授業では、史的言語学における規則性の原理とはどのようなものであるかを、具体的な言語データに基づいて考えます。</p> <p>なお、2021 年度理論言語学講座の後期において「史的言語学」を担当します。この授業では、史的言語学のいくつかの方法論について解説したあと、その方法論を諸言語のデータに適用しながら、実際の言語分析を行います。この分析作業により、受講生のみなさんの問題発見能力と問題解決能力が涵養されます。</p>
	<p>意味論への招待</p> <p style="text-align: right;">酒井 智宏 (早稲田大学教授)</p> <p>意味論は理論言語学の中で一番とつきやすい分野に見えて実は一番とつきにくい分野です。理由はいくつかありますが、一つだけあげると、意味がどこにあるかわからないことです。音と単語と統語構造は、簡単にとは言えませんが、がんばればある程度観察することができそうですし (音韻論・音声学、形態論、統語論)、言語の使用は確実に観察することができます (語用論)。これに対して、「三毛猫」という語の「発音」でも「構造」でも「使用」でもなく、ただ「意味」を観察せよ、と言われても、どこを観察すればよいのか見当もつかないでしょう。</p> <p>このようなときには、「意味」を探すことをいったんあきらめて、「意味を理解するとはどういうことか」を問うという方法があります。「三毛猫」という語を理解している人と理解していない人では何が違うのでしょうか。そもそも「理解している vs. 理解していない」の二分法は正しいのでしょ</p>



	<p>うか。</p> <p>春期講座では、どの立場に立つにせよ「意味の理解」について最低限心得ておきたい問題の一端にふれてみたいと思います。</p>
--	--